Thème 2

IPA と日本語音声学を学ぼう！
Apprenons l'alphabet phonétique international et la phonétique japonaise !

竹内　京子
TAKEUCHI Kyoko
日本大学
Kyotake(at)za3.so-net.ne.jp

- はじめに

「フランス語の授業で発音についてどんなことを実践しているか？」という質問に、特別なことはやってないと答えたとしても、フランス語の母音図や発音記号が書いてある教科書を使っている方は多いだろう。それらの記号は、「どのようなしくみ」になっていて、「何を表している」のだろうか？教授法の授業でフランス語音声学をちょっと習った方も、もしかしたら勘違いしていることもあるかもしれない。本稿では授業でフランス語の発音を扱う前に知っておきたいこと、実は知っているようで、知らない音声学の知識を紹介したい。また、フランス語の発音教育にこの発音記号が、実際にどのように使えるかについても触れたい。

まず、現在、世界で一般的に普及している発音記号である国際音声記号（l'alphabet、phonétique international、日本語では、英語で IPA と言うことが多いので、本稿ではこちらを使用する）のしくみと、その短所、長所を紹介する。そして、日本語の音声を例にして、発音記号の表記方法を示す。さらに、発音記号がフランス語の授業でどのように役立つかを考える。

- **Q1：IPA とは何か？**

歴史的には発音記号は様々なものがあるが、現在、一番世界で一般的に普及している発音記号といえば、国際音声学会（IPA : International Phonetic Association）が決めている、国際音声記号（IPA:International Phonetic Alphabet）である。「世界中のすべての言語を記述するためのツール」として作られ、新しく発見された音を記述するために記号が追加されることもある。（現在は 2015 年版）

- **Q2：すべて言語を表す記号がある？**

記号だけで表記というレベルでは、実は全部の記号は揃ってない。では、どのように記述をするかというと以下の２種類の方法がある。まず、1）補助記号というものがある。同じ記号に補助記号をつけて、違いを表現する。2）「ある言語限定の記述」であると明記し、補助記号を使った細かい記述はせずに、「IPA にある近い発音記号で代用」する。IPA を作る際に参考に

された実在の言語もあるが、基本的にそれぞれの記号はどの言語のものでもなく、あくまで「共通の指標」であるという点が重要である。ここでは、母音を例に表記方法を概観したい。

- **Q3：母音図の点は何を表しているの？**

フランス語の教科書に書いてある母音図とは少しだけ違っているが、図 1 が IPA の母音図である。この図は左側に向いた人の口腔内の様子を表している。また、それぞれの記号が書いてある点は舌の先の位置ではなく、「**舌の最も高い点（舌の山）**」を表す。母音は基本的に舌先が下に向き、どこかに舌の山ができると想定している。この図の縦は口の開き、横は舌の最も高い点が口腔内の前後どこにあるかを表している。母音図の四隅の点は口腔内で舌が最大限移動できる点を表している。四隅以外の、その他の中間の点は、（舌の山の位置ではなく）聴覚的に等分された点を表すと定義されている。ただし、現実的には、ほぼ舌の位置に対応しているとして使われることが多い。また、各点の両側に記号が表記されているが、**左が非円唇**、**右が円唇**を表す。

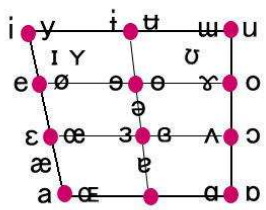

図 1

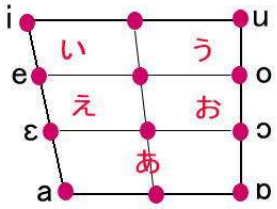

図 2

IPA の母音図は、フランス語の教科書に出てくる母音図とほぼ似ているので、このまますべての言語が表記できそうに思えるが、これはたまたま IPA がフランス語を参考にして作られたからしい。それでは、日本語の母音の位置をプロットした図（図 2）を見てみよう。一般的に図中の「あ」「い」「う」「え」「お」の位置が日本語の母音とされている。つまり、5 母音とも、どの記号にも当てはまらないのである。これをどのように表記するかというとまず、前述の 1）補助記号を使うと以下のようになる。補助記号を使っても唯一の表記に決まるというわけではなく、複数の可能性が出てくる。

[a̠][ɑ̟] [i̞] [ɨ̞] [e̞][ɛ̝] [o̞]

発音記号に付けられる補助記号はあまり一般的には見かけないと思われた方も多いだろう。日本語教育も含め、普段よく見かける発音記号は、前述の 2）の「各言語限定の記述」であると明記し、細かい記述はせずに、IPA にある近い発音記号で代用しているものである。「**本当は IPA の記号とは違う音である**」という前提を書き手と読み手が了解している必要がある。（特に読み手が知らないと誤解が生じる）ちなみに、日本語の母音は以下の記号を使うことが多い。

[a] [i] [ɯ] [e] [o]

母音について簡単に解説したが、子音についても同様なことが言える。同じ記号であっても言語によって発音の方法が様々であるので注意が必要である。

- **Q4：[　　]と/　　/はどう違うの？**

音声学を少し勉強すると、**ある言語としての区別だけを表記する（音素表記）場合は、/　　/、IPA を使ってその言語では区別はしていないが、IPA で表記できるくらいに違う（母語話者は気がつかない）場合は[　　]（音声表記）を使い、**音声表記は、音素表記で表せない母語話者が区別をしていない音声のバリエーション（異音）を示すと習う。最低限の言語の伝達には必要ないが、個人差や発音される環境による違いである。（例：「ん」の発音やザ行の子音など）

日本におけるフランス語の辞書や教科書では、ほとんどの場合が[　　]だが、英語の辞書では、/　　/が多いようである。しかしながら、IPA による音声表記を使ってもすべてを表記できるわけではないこと、外国語の学習ではまずは、細かい音声表記よりも「これから学習する言語の母語話者が区別している枠組み」を学ぶ必要があるという視点から、/　　/を使って音素表記ということも合理的であると言えるだろう。

- **Q5：母語話者は発音記号通りに発音しているの？**

ところで、母語話者は、発音記号に定義されている通りに発音しているのだろうか？答えは、前述の日本語の母音図での舌の山の位置を参考に自分で発音してみると分かる。もちろん、この位置でほぼ同じ音が出るという方が多いと思うが、「自分は本当に普段からこのように発音しているか？」ということを考えてみて欲しい。日本語教師になったつもりで、教室で滑舌よく発音する時に比べて、日常生活では、様々なバリエーションがあることが分かる。頬杖をついて、顎をほとんど動かさずに「あいうえお」をできるだけ明瞭に出してみよう。人によっては、左右で差があったり、舌の山の位置が同じでも舌全体の形が違っていたりと、腹話術とまではいかないが、様々な方法で発音していることが分かる。

近年の MRI による調音（発音の仕方）の研究で話者間の差の報告も増えてきている。もともと 3D であるものを 2D で記述するということは限界があるのである。しかしながら、ここで、母音図のところで説明した IPA では「舌の最高点の位置」ではなく「聴覚的に等分された位置」という点を思い出して欲しい。実は、IPA では舌の山の位置は等分とは定義していないのである。

- **Q6：IPA は使えないの？**

では、IPA は本当に使えないのだろうか？正確な個人差や場面差の記述という点を考えると、MRI などの画像と比較すると、3D の記述は難しいということは否めない。しかしながら、外国語教育や障害音声のリハビリなど、人の言語によるコミュニケーションのための用途に限定すると、とても有用なツールであるということを強調したい。竹内（2006）によると、初級日本人フランス語学習者の大部分が、特に音声学の知識もなく、フランス語の鼻母音の位置を母音図で再現できたという結果がある。つまり、人は未知の言語の音でも母音図でだいたいこのくらいの位置で発音されているということを感じることができ、自分でも発音してみるということをしているのだろう。IPA は、機械のように精密には測れないけれど、人間の感覚に丁度あった物差しなのである。

しかしながら、腹話術のような特殊な発音を誰でも表記できるというわけではない。同様に、個人差のある、場面限定の発音（前述の頬杖による発音など）は、母音図に示された基本的な位置の音に変換されて聞いている可能性がある。外国語教育では、腹話術の記述はいらないと思うが、母語話者の個人差や、場面限定の発音は、まずは母音図の位置通りの基本的な発音を

学習者自身ができるようになり、コミュニケーションを取れるようになってから、学習者個人で工夫するという過程でもいいのではないだろうか。

- **Q7：教室でどのように使えますか？**

では、具体的にフランス語の授業でどのように使えるのだろうか？私自身が教室で実践していることは以下のようなことである。母音については、「フランス人は普段、みなさんがもし日本語教師になって日本語を教える時のようにはっきりと口を動かして発音してはいないけれど、この母音図は、この通りに発音してみるとフランス人に通じる発音ができる素晴らしい道具。もし、音が区別できるようになったらフランス人と同じようにいろいろな口の形で発音できるように工夫をしてみて」とアドバイスをする。子音についても発音記号とともに、日本語との違いを示しつつ、それぞれの音の出し方を説明する。同時に綴りとの対応も導入する。

一見して、特に変わったことはしていないと思われるが、学生に発音記号を意識させるかどうか、発音記号の役割を教えるかどうかがポイントであると考える。音を聞いたたけで、綴りも発音記号もなしにフランス語を学習できれば、その方がいいのかもしれないが、なかなか難しい場合が多い。どうしても発音できない音、聞き分けができない音を克服するために、発音記号というツールは人の潜在能力をうまく使った発明品だと言える。

- **終わりに**

近年、録音技術が進歩し、音声記述の分野でも、発音記号を使う場面が徐々に少なくなってきているのは確かである。しかしながら、音声だけからの学習が難しい場合の手助けとして、発音記号は、外国語教育の分野でこそ、無料で簡単に導入できる道具であると考える。教師が学生に発音記号を意識させることにより、学生が自らの能力を使い発音を獲得していく助けとなるのだ。

著者は、普段、フランス語以外にも日本語音声学の授業を担当している。しかしながら、ほとんどの学生が、英語や他の言語の授業で、発音記号の話を聞いたことがないようである。授業の感想を見ると、学生は学習している語学の発音記号について知りたいようである。この授業は日本語の授業だけど、これは絶対外国語学習にも役立つと直感的に感じているのである。是非、次の授業で、発音記号の成り立ちを紹介してみてはいかがだろう。もしかすると、学生は待っているかもしれない。

参考文献

[1]国際音声協会　https://www.internationalphoneticassociation.org/
[2]竹内京子(2006), 日本人学習者のフランス語鼻母音調音の評価, Etudes didactiques du FLE au Japon, 15 号
[3]竹内京子・木村琢也(2019)「たのしい音声学」くろしお出版